

広報はしもと2017年8月号

前畑秀子ストーリー

第二十五話

ベルリンへ



1935年10月、前畑さんを含む24名（競泳18名、飛込6名）がベルリン五輪の女子代表候補選手として選出されました。この冬から翌春にかけて、水泳連盟主催の強化合宿や合同練習会が複数回に渡って実施されました。そして1936年5月に行われた最終選考会を経て、10名（競泳7名、飛込3名）の女子代表選手が決定しました。このうち、橋本小出身の前畑さん、小島さん、妙寺小出身の守岡初子さんの3名は、二大会連続での出場となりました。

6月20日、水泳女子選手団がドイツ・ベルリンへ向けて出発しました。韓国・釜山までの船旅のあとはシベリア鉄道に乗り換え、約二週間をかけてベルリンへ向かいます。ベルリンに到着した当初は調子が上がらなかった前畑さんですが、レースが近づくにつれ徐々に復調してきました。1936年8月1日、アドルフ・ヒトラーの開会宣言で、第十一回夏季オリンピック大会が開幕しました。前畑さんが決勝で競うことになる地元のマルタ・ゲネンゲル選手は、ナチス全盛期において、女子水泳における唯一、最大の金メダル候補だったそうです。8月8日、水泳競技がスタートしました。前畑さんの予選・準決勝は10日、決勝は11日、運命の日は目前です。

（木村華織）

広報はしもと2017年9月号

前畑秀子ストーリー

第二十六話

前畑頑張れ



1936年8月8日、女子二百メートル平泳ぎが始まりました。前畑さんとドイツのゲネンゲル選手は、いずれも予選をオリンピック新記録で通過し、続く準決勝も両者一步も譲らず、そのタイム差はわずか0.3秒です。

11日・決勝、スタンドは大観衆で埋め尽くされました。前畑秀子6コース、マルタ・ゲネンゲル7コース、午後3時40分、スタートが切られました。前畑さんを追いかけるゲネンゲル選手に対し、スタンドからは「マルタ、マルタ」の大声援です。残り五十メートル、前畑さんがゲネンゲル選手を引き離しにかかります。しかし、最後の二十メートルでゲネンゲル選手が再び前畑さんを追い詰めます。

「ゲネンゲルが出ております。ゲネンゲルが出ております。危ない、頑張れ、頑張れ、頑張れ、前畑リード、前畑リード、前畑リード、前畑リードしております。前畑頑張れ、前畑頑張れ、リード、リード。あと五メートル、あと五メートル、五メートル。前畑リード、前畑リード、リード、リード、勝った、勝った、勝った、前畑勝った」。河西三省さんの実況が真夜中の日本に優勝を伝えました。（木村華織）

お詫びと訂正

前号記載の試合日程に誤りがありました。正しくは、予選8月8日、準決勝9日です。

広報はしもと2017年10月号

前畑秀子ストーリー

第二十七話

前畑・小島両嬢



計り知れない重圧の中で迎えたベルリン大会が終わりました。

写真はベルリン大会の表彰式後に撮影されたもので、そこには前畑さんの自



筆のコメントが綴られています。インクが色あせて読み取れない部分もありますが、写真に向かって左側には「生死の覚悟はその人を世界的にするものとは思わなかった」と記されています（写真は相山文学園歴史文化館所蔵）。

この一文が、前畑さんの背負っていたものの大きさを教えてくれます。前畑さんにとってベルリン大会決勝は、長きに渡る苦悩や重責が安堵へと変わった瞬間でもあったのでしょうか。

さて、前畑さんと苦楽を共にした小島一枝さんについても触れておきます。小島さんは同大会の女子四〇〇メートル自由形で六位に入賞しました。日本の水泳史上、女子の自由形種目での入賞は、1992年のバルセロナ大会まで小島さんただ一人です。

前畑さん、小島さんの功績は、橋本だけでなく、水泳史に記憶されるべき大切なものといえるでしょう。（木村華織）

広報はしもと2017年11月号

前畑秀子ストーリー

第二十八話

引退と結婚



遂に前畑さんも引退です。「自分もこのオリンピック大会を最後と致しまして引退致します。永い永い十二年間の恋しい選手生活ともオサラバです。何も思ひ残す事がない」と、晴れやかな気持ちで選手生活に終止符を打ちました。

ベルリンから帰国し、日本各地で行われる祝賀行事や模範水泳の催しが一段落した1936年11月3日、前畑さんは相山校長の自宅で、夫となる兵藤正彦さんとお見合いをしました。とはいえ、正彦さんは名古屋医科大学医学部桐原外科の助手であり、正彦さんの父である丸尾錦作氏は、大正天皇の宮中顧問を務めた人物です。さすがの前畑さんも家柄の違いに動揺したといいます。しかし、丸尾家の当主で正彦さんの兄にあたる尚武氏は、「人間は健全な精神と健全な身体を持つてであれば、家柄だの身分だのといふことは取って論ずるに及ばない。今回私の弟と前畑嬢との婚約が結ばれたことは私も心から双手を挙げて賛成する」と言って二人の結婚を喜んだそうです。

当の本人は、お見合いの席で正彦さんのお兄さんをお見合い相手と間違える早とちりもあつたそうですが、1937年3月9日、熱田神宮にて前畑さんと正彦さんの結婚式が執り行われました。

（本文中の括弧内は「糸菊」昭和11年号より引用しました。）

（木村華織）

広報はしもと2017年12月号

前畑秀子ストーリー

第二十九話

突然の別れ



結婚後、間もなくして日中戦争が勃発し、夫の兵藤正彦さんにも召集令状が届きました。一度目の出征は3年8カ月、そして帰還から4カ月後、二度目は2年に渡る満州での勤めとなりました。この出征中に、前畑さんは長男正臣さんを出産しました。満州勤務を経て正彦さんが帰還した後は、次男正時さんが誕生しました。そして終戦後、正彦さんが復員すると、二人は岐阜市内に小さな家を借り、病院を開業するための準備を始めたのです。

昭和21年1月に開業しましたが、それからの兵藤夫妻は、毎朝5時から日曜日まで医者稼業に奔走していました。しかし、開業してから13年に渡る親子4人での生活の終わりは、あまりに唐突でした。昭和34年10月、正彦さんが脳溢血のためこの世を去ったのです。前畑さんは当時のことを「あのときはばかりは、オリンピックの金メダルの栄光も、練習で培ったはずの根性も、何の役にも立ちませんでした」と回顧しています。

悲しみに暮れる前畑さんに、再び手を差し伸べたのは相山正式校長でした。相山校長は、悲しみの淵に沈む前畑さんに、相山女学園での医務室勤務兼水泳コーチの職務を準備しました。こうして再び水泳と関わる日が前畑さんに訪れたのです。

（木村華織）

広報はしもと2018年1月号

前畑秀子ストーリー

第三十話

再び水泳の道へ



1960年、前畑さんが相山女学園を卒業してから25年近くが経っていました。務めるきっかけは心憂いものでしたが、相山での医務室兼水泳コーチとしての勤務は、前畑さんに再びプールサイドに立つ日々をもたらしました。医務室の仕事に加え、水泳部の指導、全国からの講演や模範水泳の依頼に出掛けることも多くなりました。

ベルリン大会以降、日本がオリンピックに再び参加したのは、第二次世界大戦後二度目の開催となった1952年ヘルシンキ大会からでした。しかしお家芸ともいわれた日本の水泳は陰を潜め、1964年東京大会も惨敗だったといわれています。こうした状況も前畑さんには堪え難かったのでしょう。「日本の水泳界のために役立ちたい」という想いが強くなり、遂に前畑さんは水泳指導に集中するため、相山女学園での職務を辞する決意をしました。

50歳を過ぎた頃、前畑さんは新設された名古屋瑞穂区の温水プールに、中京地区としては初めてとなるママさん教室を開設しました。その後も幼児、子ども、高齢者、選手クラスを立ち上げていきました。前畑さんはこうして始まった第二の水泳人生を通じて、自分に打ち克つ「努力」の大切さを多くの人に伝えていくのです。

（木村華織）

広報はしもと2018年2月号

前畑秀子ストーリー

第三十一話

オリンピック・オーダー



生涯を通じて多くの賞を受けてきた前畑さんですが、ここでは1981年に受賞した「オリンピック・オーダー（五輪功労賞）」について触れておきたいと思っています。この賞は、国際オリンピック委員会が1975年に設けた賞で、スポーツ界への多大な貢献や、オリンピック・ムーブメントに対し大きな役割を果たした人物に贈られるものです。

前畑さんは自著の中で、受賞の理由を「二度のオリンピックでのメダル獲得が評価されたのだと思う」と述べています。メダリストは山ほどいますが、「オリンピック・オーダー」を授与されるのはごく一部の人だけです。前畑さんの受賞は、選手時代から指導者時代も含め、生涯を通じてオリンピック・ムーブメントの普及に貢献した点が評価されたのです。

戦前にみる前畑さんの活躍は、日本の女子水泳が組織化するきっかけとなり、現在に続く礎を築きました。引退後は講演やプール開きへの参加、水泳教室の開設など、その時々に応じたオリンピックアンとしての役割を全うしたといえます。

1975年に創設された「オリンピック・オーダー」ですが、前畑さんの受賞は、東龍太郎、田畑政治、鈴木良徳、織田幹雄、鶴田義行に続き日本では六番目、そしてこれもまた、日本女性初の受賞でした。

（木村華織）

広報はしもと2018年3月号

前畑秀子ストーリー

第三十二話

自己とのたたかい



1983年4月、因縁の病魔である脳溢血が前畑さんを襲いました。69歳の時です。前畑さんは晩年、脳溢血から再起するためのリハビリを「苦難苦行の連続で、金メダルをとるよりも大変だと何度も思った」と懐古しています。そんな苦難を乗り越える支えとなったのは、自己に勝つことの大切さを教えてくれた水泳であり、夫・正彦さんの死を乗り越えたことであつたといひます。

自分と病気に打ち勝つことを決意し、リハビリの末に一年半の時を経て、再びプールサイドに戻ってきた前畑さんの姿は、どれだけの人にやり抜くことの大切さを伝えたでしょう。「リハビリは冷たいプールの中で歯を食いしばって泳ぐのと似ている、辛い練習を積み重ねて少しずつ記録を伸ばしていくしかない」というように、前畑さんはリハビリにおいて一人一歩の努力を重ねていたのです。

昨今のスポーツ界をみると、打ち勝つ相手が自分自身ではなく、目の前にいる対戦相手になっている風潮があります。対戦相手に勝利することで得られるものは何でしょうか。ベルリン大会での金メダル、脳溢血からの再起を通じて、自分と対峙することの大切さを伝えている前畑さんの姿から、私たちが学ぶべきことは多いはずです。

（木村華織）

広報はしもと2018年4月号

前畑秀子ストーリー

第三十三話（最終回） 人生の金メダル



これまで、橋本時代、^{オランダ}梶山時代、指導者時代、晩年という大きな括りではあります。前畑さんの軌跡を辿ってきました。その中で前畑さんが一貫して実践し、言い続けてきたことがあります。それは、やりはじめたら最後までやり抜くこと、自分自身に打ち克つこと、努力を惜しまないことです。前畑さんが選手生活やその後の人生において、常に闘い、挑戦し続けてきたのは、他の誰でもない自分自身でした。自己の限界に挑戦し、打ち克とうとする「努力」の積み重ねが、前畑さんの人生を拓いていったのです。

最後に、オリンピックの創始者クーベルタン男爵の言葉を紹介したいと思います。「自己を知ること、自己を律すること、自己に打ち克つこと、これこそがアスリートの義務であり、もっとも大切なことである」、「努力は至上の喜びである。成功は目的ではなく、より高きものを目指すための一つの方法である」。前畑さんがこれらの言葉を知っていたかは分かりません。しかし、本連載でみてきた前畑さんの姿は、これらの言葉を身をもって示していたのではないのでしょうか。前畑秀子という人は、単なる金メダリストではありません。誰との比較でもない、自らの人生における金メダルを目指すことの大切さを、自らの生き方を通じて伝えた「オリンピック」なのです。

連載終了のご挨拶



オリンピック選手は、競技成績のみで評価されてしまうことが多く、時間が経てば人々の記憶からも消えてしまいます。日本のスポーツ文化は未だ醸成されているとはいえません。だからこそ地元が舵を取りながら、記録だけでは計れない選手の記憶や功績を未来に伝えていく必要があるのです。

連載がスタートしてから2年9カ月、このあいだに朝ドラ誘致活動も実行委員会をはじめとする市民の皆さんによって、活発に展開されました。前畑秀子という人物によって、橋本市民が繋がり、都市が繋がり、そして今、その輪が広がるうとしています。前畑秀子という人は時空を越えて人々を繋ぐ偉大な人です。

ご縁あつて2015年の8月から「前畑秀子ストーリー」を連載してまいりました。長期間に渡りお付き合いいただきまして、誠にありがとうございます。

（木村華織）